

翌日。

春の朝は少しだけ肌寒い。

ストールを羽織ったルルは、あくびをしながら^{ほうき}箒を握った。

「……ふう」

「大きなあくびだ」

入口の花壇に水をあげていた俺は、思わず笑った。

「まさか、庭師の朝がこんなに早いとは思わなかったわ」

「俺に合わせなくてよかったのに」

「そうはいかないわよ。あなたが働いてるのに私が寝ているわけにはいかないでしょ」

「いやいや。雇い主さまだからこそ、朝はゆっくりしていただいて」

「冗談言わないで」

「あはは」

「あ、ロッソおばあちゃんだわ」

ルルの視線を追うと、高齢の女性が歩いていた。

こちらに気づいた女性が緩やかに手を振ったので、振り返す。

「ご近所さんかな」

「ええ、二軒先のロッソおばあちゃん。足が悪いから、無理のない範囲で散歩をするようにお願いしているの」

「じゃあ患者さんの一人なんだ。でも、足に負荷がかかってもっと悪くなったりしないの？」

「逆ね。使わないほうが悪化する場合もあるのよ」

「へえ……、そういうものなんだね」

「今日は足の調子がよさそうね」

「見ただけでわかるの？」

「当然よ。薬師^{くすり}だもの」

「薬師だから、か……」

ルルの言葉に感心していると、彼女は落ち葉をまとめはじめた。

「塗り薬をいつも作っているから、今日の配達でロッソおばあちゃんに会うと思うわよ」

「そっか、じゃあきちんご挨拶しないとね。緊張するなあ」

「優しい人だから大丈夫。さて、朝食にしましょう」

彼女と一緒にご飯を食べたら、はじめての配達が始まる。



「ただいま」

地図を片手になんとか配達を終えることができた俺は、家へ戻った。

「おかえりなさい。迷わなかった？」

「地図がわかりやすかったから、大丈夫。ロッソさんとも挨拶してきたよ」

「あら、どんな話をしたの？」

「『新しい庭師さんが来てくれて本当によかったわ』って。ルルのことを心配してたみだいよ」

「……ありがたいわね。今度お礼を言わなくちゃ」

それから、ルルは手元の診療記録に目を落とす。
眉間にしわを寄せ、少し悩んでいるようだ。

「なにかあったの？」

「え？」

「なんか、難しい顔してるからさ」

「……今日、発熱で診察に来た男の子が誕生日なんですって」

「ああ……誕生日に熱を出しちゃったんだね……」

「そう。だから解熱薬^{げねつ やく}をすぐに届けたいと思っているの。でも即効性はないし、今日は寝込むだけになっちゃうかもしれないわ」

「うーん。あ、だったらさ。一緒にプレゼントを持っていくのはどうかな？」

俺の提案に、ルルの表情が途端に明るくなる。

「とてもいい案だわ！ それじゃあ花束も添えましょう！」

「いいね。薬草園にある植物を使ってもいい？」

「もちろんよ」

「プレゼントはどうしようか」

「木工店でおもちゃを見ていくのはどうかしら」

「うん、そうしよう。それじゃあ早速、花束を作ってくるね」

「私は、解熱薬を作るわね」

俺は食用花を中心に小さな花束を作った。

そして、ルルとともに町へ出かける。

彼女の案内でたどり着いた木工店は、木の香りに包まれていた。

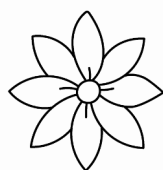
「その男の子ってどんな子なの？」

「名前はフォル。五歳なのだけど、生まれたときから体が弱くてよく熱を出しているの。いつも室内で遊んでるそうよ。賢い子だと聞いているわ」

「じゃあ、そうだなあ……この中なら、どれがいいかな」

店内には輪投げやヨーヨー、ボウリングセット。

積み木にパズル、木琴^{もっさん}やタンバリンなどの木製楽器などが並べられている。



「じゃあ、行きましょうか」

プレゼントを選び終えた俺たちは、ふたりでフォルの家へ向かう。
事情を話して母親にプレゼントと花束、薬を手渡すと、何度もお礼を言われた。
彼女をなだめた俺たちは、帰路へつく。

「フォルが少しでもうれしい気持ちになってくれたらいいわね」

「そうだね。喜んでくれたらいいな」

「ええ。……ツバメ、ありがとう。私ひとりだったらこんなに素敵なこと、思いつかなかったわ」

「大したことしてないよ」

「いいえ……。名案だったわよ」

ルルの褒め言葉に、俺は少し肩をすくめる。
春の淡い空に目を移せば、流れながらほどけていく雲が浮かんでいた。



それから数日後。

俺が配達に出かけているときに、フォルがお礼を言いに来てくれたらしい。

昼食の時間に、ルルが話してくれた。



「フォルが笑顔で言っていたわ。『おねえちゃん、おにいちゃん、ありがとう』って」

「そっか、体調も良くなって、プレゼントも喜んでもらえてよかった。……あ、このドレッシングいいね」

「本当？ 暑い日が増えてきたから、レモンを多めにしてみたの」

こうして食事のときに仕事の話や他愛ない話をする。
少しずつ会話が増えていき、彼女との共同生活に大きな問題もなく。
気づけば、数週間がたっていた。